

横浜ナザレン教会 2017年度三位一体後第十七主日礼拝
「沈黙から始まる喜びの物語」
ルカ福音書 1:5～25, 詩編 62

5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。 6 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。 7 しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。

8 さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、 9 祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。 10 香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。

11 すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。 12 ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。 13 天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。 14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。 15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、 16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。 17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

18 そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」 19 天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。 20 あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

21 民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。 22 ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。

23 やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。 24 その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こ

う言った。 25「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

1 救いの歴史

使徒信条は、時系列に私たちが信ずる事が並んでいます。父なる神は「天地の造り主」であることが告白されます。そして主イエスは「聖霊によりて宿り、乙女マリアより生まれ」で始まり、「かしこより来りて生きる者と死にたる者を審きたまわん」で終わっています。主イエスへの信仰内容はすべて時系列です。更に聖霊への信仰は、「聖なる公同の教会」と教会が集められた時に始まり、終わりの時に実現すると言われている「体の甦り、永遠の命」で終わっています。

ルカによる福音書もそうです。ルカは、最初に「最初から詳しく調べたことを順序正しく書いて」テオフィロさまに送る…言っています。物事を起こった順番に並べて書く…これは歴史物語の書き方です。ルカは救いの歴史物語を描き始めているのです。

彼はその救いの歴史物語を旧約聖書の世界から始めました。今日の聖書箇所です。この箇所には旧約聖書の世界を表すシンボルが散りばめられています。神殿、祭司、不妊の夫婦などです。また、文章も4節までとはがらっと変わっています。日本語では分かりませんが、4節までは洗練されたギリシャ語です。しかし、5節からは旧約聖書の言い回しを多用したイスラエル風のギリシャ語を使っています。当時、ルカ福音書の冒頭部分を読んだ人は、エルサレム神殿での出来事を描くイスラエル風の言葉遣いで語られる物語に、旧約聖書の世界へといざなわれたのではないのでしょうか。このようにしてルカは細部まで気を配って、救いの物語を書き始めています。そこには、今、まさに始まろうとしている救いの物語の特徴がふんだんに盛り込まれているのです。今日はそれをご一緒に見てまいりましょう。

2 人間の歴史の中で

先ず第一に神の救いの物語は、人間の歴史の中で実際に起こった神の出来事だ…ということです。それは5節を見てもわかります。ユダヤの王、ヘロデの時代…とあります。彼はローマ帝国の皇帝に取り入り、BC37 から BC 4 年までユダヤ全土を王として治めました。ユダヤの王ですが、ユダヤ出身ではありません。南のイドマヤ出身です。大規模な都市を建設したりと政治家としては優秀だったようですが、ユダヤの民衆からは嫌われていたと言われます。

そのヘロデ王の時代に生きたアビヤ組の祭司ザカリア。彼がこの救いの歴史物語の最初の登場人物です。この時代から 1000 年位遡ってダビデ王の晩年、祭司たちをその家系で 24 の組に分けた…と歴代誌に出てきます。ザカリアが属していたのは、そのうちのアビヤ組でした。ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ

組の祭司ザカリア…世界史の中で、信仰の民の歴史の中で、救いの物語は始まります。

3 典型的な信仰者

ザカリアの妻はエリサベト。アロンの家の娘の一人とあります。アロンというのは出エジプトでモーセを助けた兄アロンのことです。アロンは神さまからイスラエルの祭司となるように命じられました。エリサベトは、そのアロンの子孫。れっきとした祭司の家の出身でした。ザカリアもまたアビヤ組に属する祭司。ザカリア・エリサベト夫婦は、地位は高くなく貧しかったようです。が、モーセの時代、あるいはダビデ時代にまで遡れる祭司家柄の末裔であったのです。

更に6節には二人は神の掟と定めをすべて守り非の打ちどころがなかった…とあります。この「掟と定め」という表現も旧約聖書によく出てくる表現です。この夫婦は典型的な敬虔な信仰者であったのです。神の律法を注意深く守り、その規定や倫理を遵守したのであります。

4 古い契約の限界

ですが、そのような二人にも拘らず、エリサベトは不妊でありました。現代でも「不妊」は深刻な問題です。しかし、この時代の不妊は、もっともって決定的で深刻でした。子どもができない…という事は、命を引き継ぐ者がいないという事。つまり、「先がない」「死んで終わり」という事です。行き止まりの未来。それは神の祝福を受けていない証でした。二人の命は死で終わる命であり、未来がないのです。非の打ちどころがないほどの正しい二人なのに。なんという矛盾でしょうか。ザカリア・エリサベト夫妻は、死に支配された生を呻きにならぬ鈍い痛みをもって過ごしていたのではないのでしょうか。

それは、まるでこの時代の神の民—イスラエルの状況のようでもありました。人間である皇帝を神と崇めるようなローマ帝国、武力で弱い者を制圧する者達、まことの神を知らない民に支配されて死の中に閉じ込められていたような未来のない行き止まりの中で、神の民もまた呻き声をあげつつ苦しんでいたのです。

これは、主イエスが現れる前の信仰の限界を描いているように思えます。人の行いでは、人の知恵では、結局、死を乗り越える事はできないのです。

5 人間には分らない

しかし、死しかない、行き止まりの未来が変わる事はない…それ以外には考えられなかった所で、意外にも神は力強く介入してくださいました。ここに救いの物語の大きな特徴が現れています。「人間は分らない」という事です。私

たちには、この救いの物語がどのように展開するか分からないのです。どうしてそうなるのかもわからない。ただ神のみがご存知の救いの物語。ですから、救いの物語で人間は全くの未知の出来事、新しい出来事と出会うのであります。

それは物語の発端からもわかります。ザカリアは自分が属するアビヤ組が当番となったので神殿で奉仕していました。奉仕の期間は一週間、年に二回の奉仕です。神殿の奉仕には様々な務めがあったようです。どの務めにつくかはくじで決められました。

聖書ではよく「くじ」で決める場面が出てきます。イスラエルの民がエジプトを脱出していよいよ約束の地に入った時、くじを引いて、それぞれの部族が住む場所を決めた…という話が民数記には出てきます。また主イエスを裏切ったイスカリオテのユダがいなくなったので十二使徒が一名欠けた時、人々はくじを引いてマティアを選びました。くじの結果は人間には分かりません…神がお選びになるのです。

6 一世一代のおお仕事

そのくじで、ザカリアに大変な事が起こりました。くじで聖所で香をたく務めにあたったのです。神殿の奥にある金製の香壇に運ぶ役割です。が、それだけではありません。同時に人々に祝福の祈りを行うことが定められていました。全部で二万人とも言われる祭司。その内の一人だけがこの名誉な務めに携わる事ができるのです。祭司たちはこの務めにあたる事を熱望していたそうです。

香をたくというのは、人々の祈りを立ち上げる香にのせて神にささげるという意味もありました。だから民衆は祭司が香をたいている間、聖所の外で祈りを捧げていたのです。

彼らは何を祈っていたのでしょうか。それぞれの人生の悩みを祈っていたでしょう。また、自分たちの国イスラエルを救う救い主を待ち望む祈りもあったでしょう。

一方、二万人に一人しかできない重要な務めにあたったザカリア。それはそれは緊張した事でしょう。彼は定められた手順を守る事に必死だったのではないのでしょうか。私は駆け出しの牧師ですから、色々な式の司式をするとき、とても緊張します。冬でも汗だくになります。結婚式のスピーチとかめったにしない重要な役割を初めてつとめる時、皆さんもとても緊張するのではないのでしょうか。おそらくザカリアもそうだったでしょう。聖所まで入って香をたき、出てきたら外で待っている人たちに祝福を祈る務め。このおお仕事を手順通りに滞りなく行う…ザカリアはその事だけを考えていたのではないのでしょうか。

緊張するザカリアの緊張する手によってたかれたお香は、ザカリアの祈りと外で待つ大勢の人々の祈りをのせて、神のみ元へと立ち上っていきました。

7 恐れるな

しかし、思ってもみない事が起こります。神ご自身がザカリアにとっては一世一代の晴れ舞台を妨害しました。ザカリアの目論見は崩れ去ります。彼が思い描いてもみなかったことが起こります。11 節です。香壇の右手に明らかに人間とは異なる者が現れました。主の御使いでありました。「香壇の右に立つ」というのは、この御使いが神からの全権を受けてザカリアの前に立っているという意味です。ザカリアの驚愕はいかばかりだったでしょう。

そしてザカリアは恐怖の念に襲われた…とあります。神と人が対面するという事は、いつも人間にとっての全く新しい出来事です。人間が全く想像もつかない事、分からない事なのです。恐れを感じずにはいられません。無から一切の存在を呼び出した創造者の前に出た時、被造物である私たちは恐れずにはいられないのでしょうか。また、罪とがの多い自分が神のみ前に立ち続けられない…そうを自覚した時、私たちは底知れぬ神の審きの厳しさを思い消え入るような不安に囚われるでしょう。更に、永遠の神のみ前に立った時、塵に帰る自分の滅びを示され存在が打ち消される恐怖を覚える事もあります。色んな恐れを感じるでしょう。しかし、どのような種類であろうとも、神と出会った時、人間の側にあるのは恐れであるのに変わりはありません。「あなたの内に恐れがないようであるなら、まだ神と人の真の出会いが起こっていない、天使は現れていないのだ」とある人が言いました。そのとおりだと思います。神との出会いに恐れはつきもののなのです。この礼拝の間、今、この御堂に神の御使いが現れたとしたら、私たちは全員、恐れおののくのではないのでしょうか。

しかし、神と出会い恐れにとりつかれた人間に、神は語りかけてくださいます。「恐れる事はない、ザカリア」。人間自身がこの恐れを取り去るのではありません。神ご自身が恐れを取り去ってくださるのです。

8 喜びの物語

そして、御使いが語りだしたのはエリサベトが男の子を生む…という知らせでした。しかも、この男の子に定められた名前はヨハネ。これは「神は恵み深くありたもう」という意味の名前であります。ユダヤの習慣では、子どもの名前は親が決めていました。ですから、神が子どもの名前を告げるという事は、生まれてくる子が特別に神に選ばれた務めを果たす者であるという事です。更に「その子はザカリアにとって喜びと楽しみとなる」と天使は続けます。

先週の水曜日 10/4 は霞ヶ丘幼稚園の運動会でした。沢山の保護者たちがやってきました。皆さん、我が子や我が孫が元気に踊ったり走ったりする姿を楽しそうに喜んで夢中でみていました。私はその様子を牧師館の二階から眺めていたのですが、子どもを育てる事は苦勞も多い事ですが、喜びと楽しみをもたらすようです。

しかし、天使が言っている「喜びと楽しみ」は、子育ての時に感じる喜びや楽しみとは全く違います。原語のギリシャ語は、主イエスを通して神から与えられ、約束された救いの喜びと歓喜を表す言葉なのです。

自分という限界の中に自己中心という罪に生き、やがては死にゆく儚い命しかない人間。自分の力では死を乗り越える事のできない人間…自分たちでは自覚がありませんが、人間というのは、神なくしてはどころんでも惨めなものなのです。しかし、主イエスはその悲惨な人間一人一人を心の底から憐れみ、その罪を十字架によって肩代わりしてくださいました。徹底的に苦しんだ死なれました。これもまた人間には全く分からない事、人間には理解できない徹底した愛です。徹底した愛をもって死んで葬られました。父なる神はその独り子が塵に返るままに捨て置く事ができず、三日後に主イエスを甦らせてくださいました。そして御子を信じる者には、御子の復活の命に与る、全く新しい命をお与えになったのであります。御子を信じる者にはなんの働きがなくとも、罪に縛られず、神の子の愛に生きる自由をお与えになったのであります。神に覚えられ神を知り、神と交わりながら神の子として歩む命をお与えになった。深い悲しみ、どん底の絶望、そして死をも乗り越える命です。

天使が言っているのは、主イエス・キリストを通して人間に与えられたもの一神の子としての命を喜ぶ喜びであり楽しみです。踊りだすような飛び上がり歌いだすような大きな喜びをさす言葉なのです。神が始められる救いの喜びの物語。その喜びの物語がエリサベトが生む子によって幕があく…と御使いはそうのようにザカリアに告げます。

その喜びの物語は、神の祝福の理解を劇的に変えました。主イエス・キリスト以前、多くの子どもを持ち広い豊かな土地を手に入れる事が神の祝福でありました。逆にいえば子どもがいないという事は神の祝福を受けていない証だったのです。不妊の夫婦は神の祝福が受けられない自分たちに苦しみました。アブラハム・サラ、イサク・リベカ夫妻、ヤコブ・ラケル夫妻、預言者サムエルの母ハンナ、そしてザカリア・エリサベト夫妻。

しかし、十字架と復活の主イエス・キリストが現れた時、真の祝福はキリストと関わり新しい命に生きる事であると人々に示されたのです。その証に、このエリサベトが最後の不妊の女性であります。新約聖書には主イエスが不妊の夫婦に子どもを授けた奇跡は全く出てこないのです。主イエス以降、神と人間のあり方が変わり、神の本当の祝福が人間に伝えられたのです。

9 人の沈黙

しかし、ザカリアには到底信じられません。「どうしてそれが分かるのでしょうか」と御使いに質問します。御使いは答えます。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者」—自分が神のみもとから喜びの知らせを携えてやってきた事がその

答えだ…天使はそれ以外には答えようがなかったのでしょうか。そしてザカリアに「あなたは口が聞けなくなる」と告げます。

以前、私はどうしてもこの部分が納得できませんでした。旧約聖書には不妊の夫婦は沢山でできます。有名なのはアブラハムとサラの夫婦です。アブラハムもサラも、神から「来年の今頃、サラは男の子を生む」と告げられても全く信じる事ができませんでした。しかし、アブラハムもサラも罰は受けていません。どうしてザカリアだけ罰を受けるのだろうか…と疑問に思っていました。

しかし、この部分を繰り返し読み、この時から10ヶ月口をきけなくなったザカリアを思い描いて考えを巡らして思いが変えられました。「口をきけなくなる」というのは罰ではないのではないか？寧ろ恵みなのではないか…と思うようになったのです。

確かに思うように喋れない、人に伝える事ができないのはとても辛いことでしょう。歯がゆい思いがすることでしょう。

ですが、ザカリアはその苦しみの中で神の語りかけに耳を澄ますようになったのではないのでしょうか。ヨハネが生まれるまでの十ヶ月間、天使ガブリエルの言葉を繰り返し繰り返し頭の中で反芻し祈ったでしょう。「これはどういう意味なのだろうか」「生まれてくる子はどのような者となるのでしょうか。神さま、教えてください」と。またこうも祈ったかもしれない。「神さま、私には救い主に先立つ者の親となることはできません。どうしたらいいのでしょうか」と。そして神の答えに沈黙して耳を澄ませたに違いありません。

私はザカリアの気持ちが分かるような気がします。ここで少し牧師の務めの話をします。牧師の務めは様々ですが、何より重要なのは礼拝説教―御言葉の取次です。その為にできる限り本を読んでいますし、ギリシャ語や英語の聖書とも取り組みます。色々なことを学びます。でも、だからと言って御言葉が取り次げるかというところではないのです。本を読んで手にいれた知識や考えを自分の構想通りに並べただけでは説教にはなりません。

必ず最後には神のみ前に「御言葉をください」と祈り、沈黙し、神の語りかけに耳を澄まさねばならないのです。しかし、いつもすぐに神さまが応えてくれるわけではありません。私は金曜日・土曜日の牧師ほど、世界で惨めな存在はいないのではないかとよく思います。語るべき言葉を求めても出てこず、黙り込むのです。言葉を失う。途方にくれてしまう。

ですが、その苦しい時間、沈黙して忍耐強く待った時ほど、神の御言葉は鮮やかに与えられます。神は今も生きて働いてくださっている事を知る時です。神のみ前に沈黙し、忍耐強く御言葉を待つ…それは限りなく大きな恵みだと御言葉が与えられた時に知ります。

ザカリアもそうでした。十ヶ月後、エリサベトがヨハネを生んだ時、ザカリアの口は解き放たれました。長い沈黙を破って彼の口から神への賛美が溢れ流れてきます。1章の最後にある「ほめたたえよ」で始まる詩です。ザカリアの口が閉ざされた間、彼は苦しみつつも、神から豊かな豊かな恵みを受けてい

たのでした。そして、主イエス・キリストの先駆けである洗礼者ヨハネの父となるべく整えられていたのであります。

神は今も生きて働いてくださいます。私たちの間で救いの業をなしてくださっている。私たちには分からない。しかし、神は必要に応じて私たちに示してくださる。ザカリアにも示してくださった。それは神の子としての全く新しい命にこの世にあって生かされるという、飛び上がるほどの喜びの物語です。それは儂い喜びではない。罪の悲惨を死や絶望を乗り越えた確かな喜びなのです。ですが、人が沈黙しなければ、神の救いの語りかけを聞く事はできません。神の救いの物語は、この横浜ナザレン教会で私たちが沈黙する事から、始まるのです。

私は先ほど説教準備の例をあげましたが、それは牧師だけの事ではありません。教会の伝道の業もそうなのです。私たちは来週、皆さんが献身的にご奉仕して備えてくださったチャリティー・バザーを実施します。しかし、人間の思いだけで行ってしまっては教会の業にはなりません。ですから私たちはバザーの事を考える度に、み前に沈黙して祈り、私たちがこのチャリティー・バザーを通じて人々に何を伝えるべきかを神に祈り求めて備えてきました。教会の業のすべては、み前に沈黙する祈りによって始められるのです。これがなければ教会の業ではありません。

10 物語の始まり

今から始まる一週間、私たちの間で新しい救いの物語が始まろうとしています。私たちが沈黙し、神の語りかけてくださる言葉を聴く事から始まります。そして、主イエス・キリストによってもたらされた全く新しい命に与る物語が始まります。私たちもまたザカリアやエリサベトのように主の救いの目撃者とさせて頂き、救いの物語に新たな一ページを加える事ができますように、切に祈る次第であります。